全美協・メールマガジン
zenbikyou mail magazine
全国大学造形美術教育教員養成協議会メールマガジン　2023.5.1 第68号(毎月1日発行)

アーティスト・レジデンス・イン
オーストリア　ヴォルフガング

富山国際大学　佐部利典彦

この原稿を書いている数日前にオーストリアから帰国しました。アーティスト・レジデンスの open call に応募し、参加アーティストとして選んでもらえました。18 人のアーティストが世界から集まりますが、日本人は私だけ、経験上英語が満足にできないのもきっと私だけで楽しみでもあるのですが、いつも心配も隣り合わせです。

たいてい、海外に来ると身体が何かしらの反応をしてもどしたり、くだしたりします。それで何か、体がすっきりとリセットされた感じになり、また日本では寝つきが悪く、遅寝遅起きの私が、ヨーロッパでは時差のおかげで早寝早起きとなり、体調が良くなってきて、インスピレーションがやってきます。制作時に集中力が増して、次に画面に置く色やタッチがスローモーションのように浮かんできて、いわゆるゾーンに入ることができたような気になります。それも制作のことだけを考えて、集中できるこのプログラムのおかげでしょう。しかし、いつもいざ参加するタイミングになると何故、英語をもっと話せるようにできなかったのか後悔しますが、もう自分が英語を話せる人だと自分に言い聞かせ、逃げないで、積極的に話していくしかないと思うことにしました。

ヴォルフガングの湖と山

制作については湖畔のまちのヴォルフガングから受けるインスピレーションをベースに

制作したいと考えていました。ちょうど初日の朝、薄暗い頃に目が覚めて、ホテルの窓からの湖と山と空と雲の景色を時間差で３枚スケッチをすることができました。何とか絵になりそうだと思えました。この景色を白と黒だけで画面をひっくり返しながらのせていってみようとコンセプトがかたまりました。制作については各作家まちまちで、現地でのことやものを表現するアーティストもいれば、普段、自分のアトリエで行っている制作を,場所を替えて行っているだけの人もいます。

私は、一枚目の制作をもう少し描きたい気持ちをおさえながら、いい感じになったところでやめました。

一枚目の制作の様子

二枚目は日本でのスケッチをもとにあたためていたアイディアを描いていくことにしました。最近、白黒で制作していたので、久しぶりに色を使ってみようかという欲が湧いてきて、色を使うが結局、何度かドローイングしながら、のせた色を白で消して整理して二枚目は完成とした。

三枚目は次の制作への足掛かりをもちたいと考えて、アイディアや色をかなりミックスして思いっきり手を動かしてみましたが、やはり、to much な感じとなり、そういう意味では次の制作への手掛かりとなりました。

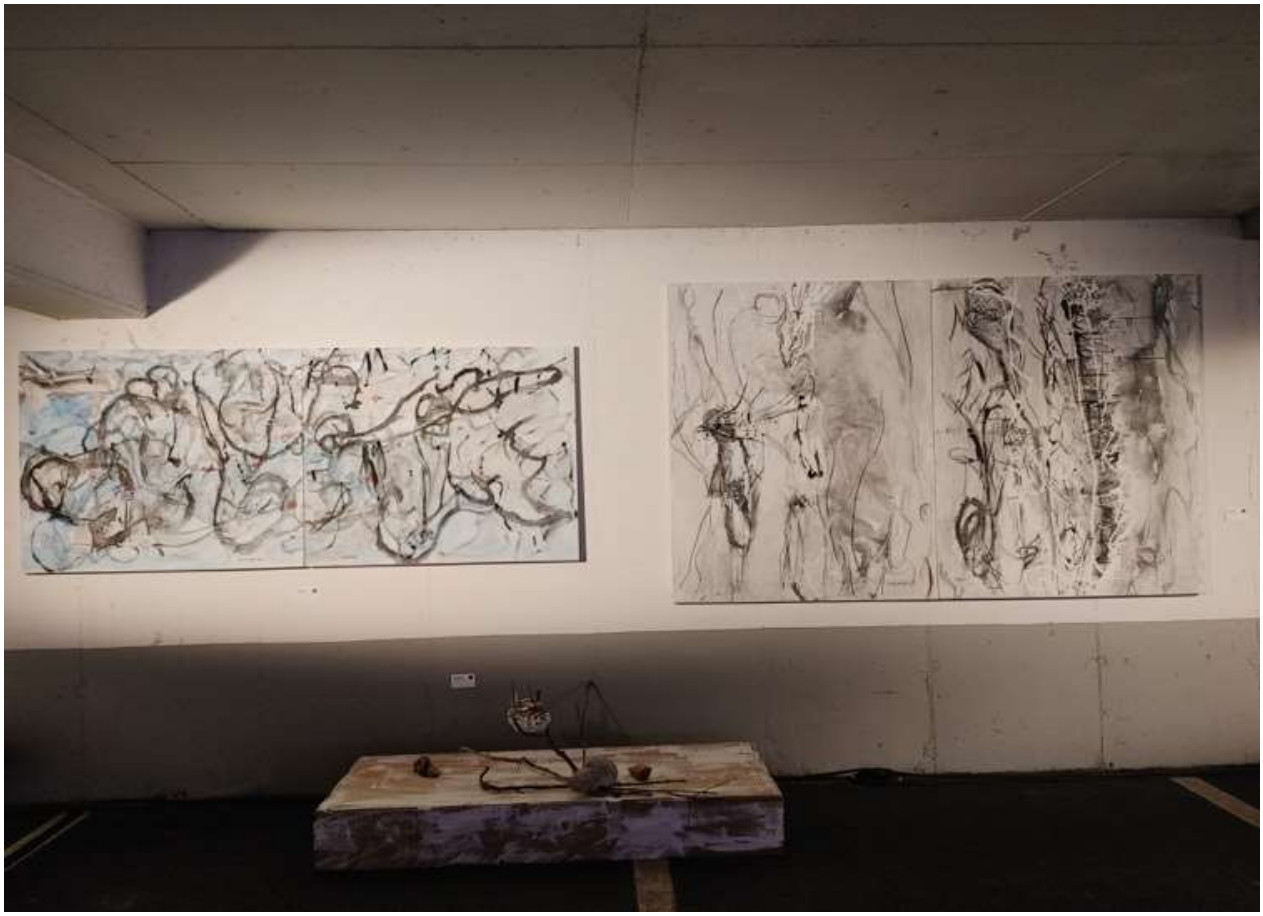
この地域は湖と山があるので、船上パーティーや雪山トレッキングなどの地域を体験するプログラムがあり、また、ディナータイムでは毎晩全員そろって豊富なワインやビールと共にそれぞれのアートについてプレゼンをしたり、今後の企画について話したり、ダンスパーティーになったりします。

私は、アーティストとして制作をしますが、現在、アーティストが滞在することでそのアーティスト思考や才能などを教育や文化を勿論、産業についても活かすことができる社会モデルを構築することができないかということを研究しているので、制作時やディナータイムに企画者や作家、支援者と頑張って英語でやりとりしてみました。この 18 人のアーティストを世界から集め、４つの四つ星ホテルで滞在、制作、地域でのアクティビティーに展覧会を基本的には二人で行っているとのことでした。この二

人は参加のアーティストでもあります。私は最近、展覧会やアーティスト・レジデンスにおいてはアーティストが企画者を兼ね行うより、キュレーターが全体をマネージメントしていく方が、無理もなく、客観的で良いのではないかと考えていて、そんなことを今回の企画者クレメンにもぶつけてみました。彼らはスロベニアを拠点に様々な国で交換的にレジデンスを行っています。こういった企画は一人か二人企画者がいればできると言い切ります。資本はアート、文化を支援する団体はだいたいどこの国でもあり、それに応募する。そしてキュレーターがいるとどうしても作品の良し悪しに言及する部分がでてくるがこの活動は長い目で考えていて、レジデンスでの作品の良し悪しについては関係ない、どの国のアーティストもみんな受け入れるし、それぞれが良いところがある。交流することで、今後の活動につながると言っていました。こんな心持ちになれれば差別や戦争なんて絶対おこらないと思えました。また、キュレーターならやらなかったかもしれないのですが、最終的に展覧会は四階構造のパーキングの四階部分で行われました。確かにまちなかには展示に向いているような広いスペースはありませんでしたが、掃除しながら、壁にドリルで穴を開け、ビスを打ち、作品を掛け、若干排ガスの匂いのする中での作品披露となりました。

展示会場のパーキング

展示会場内部の様子



佐部利作品展示の様子　三枚目は展示できず

前日に、お土産を買ったお店の女主人が清算の時に「Are you Artist?」と話しかけてきました。「Yes」と答えると「I will go to exhibition tomorrow. Are you there?」と。地域の人が認知してくれていて、展示や交流を楽しみにしてくれている人がいることを知りました。クレメンは展覧会こそが、地域貢献だとも言っていました。

作品の良し悪しやキュレーション、展覧会については他の作家でもいろいろな意見がありました。私は少なくとも子どもたちが創る作品に関して良し悪しは関係ないと考えています。やはり、いかに自分が考えたことを自由にやりからかすことができるかが重要であると考えています。そう考えると日本の造形、美術教育は考えるべき点、変えるべき点が多々あると思います。

お土産店の女主人

それについても自分が良いと思う実践を保育園で行う準備を進めています。

そんな話をする時もあれば、ワインが進むと音楽がかかり、みんなそれはそれは楽しそうに踊り出します。

正直そんな踊りを私はできないので、苦手な時間です。仲良くなったオーストリアの女性のアーティストターニャが何度もダンスに誘ってくれる。もはや踊らないわけにはいかない状況で思い切って飛び込んで身体を動かしてみました。もはや自由な感じで動いてしまえばよいと思えました。するとアルコールもまわり、音楽もいい感じで不思議な一体感を感じました。みんなそれぞれ自由に音楽に合わせて動いています。人生もこんなふうでいいのではないか、それぞれの人生にそれぞれの生き方でそれを合わせたい時は合わせる、独りで勝手に動きたい時は勝手にやる、そんなふうに思えました。色々な国の人が集まると、様々な環境で色々な生き方があって、色々な表現があって、もっともっと好き勝手にやってよいのだと思えてきます。そんなことが子どもたちにも必要ではないでしょうか？教師や保育士だけが行う教育ではなく、学者やアーティストやクラフトマンやミュージシャンや哲学者やパティシエやいろいろな人が教育に関わるのがきっとよいのだと思います。フランスやイギリスではクリエィティブな教科が学びの中心となっています。我々の行っている美術教育といわれているものに、本当に多様性やクリエイティビティーはあるのだろうか？そこにアートの本質はあるのだろうか？私はちゃんとした「Art education」を考えて、実践、提案したいと考えています。

ダンスな夜

アーティスト・レジデンスもいろいろなタイプがあり、美濃市で十七年続いたレジデンスでは一人もキュレーターや美術専門の人が運営側にいませんでした。でもとてもおもしろいことが起こっていました。青森ではそこでレジデンスを行ったあとにヴェネチアビエンナーレの国代表に選考される作家を多く輩出しています。メンターとアーティスト、クラフトマン、クラフト工房を掛け合わせたクリエィティブの匂いが強いレジデンスもあります。アーティストが滞在しながら、学校等で生徒と一緒に制作、

実践する例もあります。オックスフォード大学も昔からレジデンスを行っています。ノーベル賞をもらう科学者の多くが、アートが趣味だと言われます。

アーティスト・レジデンスに関わりながら、working, researching, teaching 共に進めていこうと考えています。